慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『雪女物語・ 下』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	三田國文 No.48 (2008. 12) ,p.97- 103
JaLC DOI	10.14991/002.20081200-0097
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20081200-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『雪女物語・下』翻刻

石川　透

凡例

本書は、架蔵の絵巻『雪女物語・下』である。本書の影印は、『広がる奈良絵本・絵巻』（三弥井書店、二〇〇八年一一月刊）に紹介した。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

［雪女物語・下］

さるあひた、たゝのまんちうは、かの女房をさきにたて、によいかたけの、たに〳〵峰〳〵を、たつね給ひけれとも、ほらは、さらになかりけり。

こゝに、いはのかけに、ちいさきうろのあり。かの女□うに、「これは、いかに」と、とひ給へは、「かやうのうろにて候」と申す。「さらは、そのうろを、かりいたせ」と、おほせけれは、大せいのせこのもの、ゆみ、なきなた、くまてなとにて、せむれとも、けたもの、一つもいたされは、「さて、いかゝすへき」と、ありけれは、御ともの中より、一人、すゝみ出て、申やう、「それ、□たものは、なましはをたきて、ふすへたるには、しかし」とそ、申ける。

まんちう、きこしめし、「さらは、ふすへよ」とて、まつ、かえてのえたを、たきて、大勢、手に〳〵、あふきをもちて、かのあなへ、けふりを、あふきいれけれは、しはしもたまらす、たぬき三ひき、いてけるを、やはか、のかすへき。そくしに、みな、うちころされたり。

［挿絵・第一図］

まんちうは、よろこひ、きさんし給ひけり。さて、三つのたぬきを、五てうかはらにさらし、立たれたるふたに、「此ころ、らく中にて、人をなやましける雪女」とそ、かゝれたる。

これを見て、京わらんへの、申けるは、「かけられたるたぬきは、三つともに、ふるたぬきにあらす。けしやうするたぬきは、としふるきは、こうをつみたるたぬきこそ、はくるなれ

と、むかしより申ならはせり。此三つのたぬきは、よも、ゆきをんなには、あらし」と、人〳〵、申ける。されはこそ、あんのことく、又、雪をんな、出て、人をとると申す。

まんちう、きこしめされ、「これ、やすからぬ事也。たぬきにては、あらし。いかさま、てんまのしよきやうたるらん。さりなから、かの女はうに、いよ〳〵、たつねてみん」と、おほしめし、又、かのけちよをめされ、「これは、いかに」と、の給へは、女はう、申やう、「このほとの、さらされたるたぬきは、ふるたぬきにあらす。かの雪をんなは、こうをつみたるたぬきにて、しんつうをえたるものなれは、みかりのときは、さためて、たの山へ、にけつらんと、そんし候。又、まへかとのたちきすも、さつそく、いゆへし。たとひ、すまんきにて、せめ給ふとも、しんつうをえたるもの、いかてか、たやすく、ころさるへき。をんなにけしやうして、むみやうの歌を、よみ申候あひた、ひそかに、たゝ一人、御出候ひて、うたの返しなとをあそはし、かの雪女をあいして、やなひへ、よひいれたまひて、さて、もん、木戸、とほそのすきまなく、御ふさき候ひて、かの雪をんなを、ころし給はゝ、よも、のかれ候まし。さりなから、天しやうをけやふつて、にくる事も候はん。そのようかいを、よくなされて、たいし給ふへし。もとのたぬきに、しやうをかへ候はんとき、そのしかいを、とりとゝめ給はすは、したひ、又、いきかへり候まゝ、その御心え、なさるへし」とそ、申ける。

まんちう、「けにも」と覚しめし、「たれか、しかるへきや」と、おほせられけれは、人〳〵、申やう、「うこんのしやうけんこそ、ふんふのさふらひにて候」と、申けれは、すなはち、雪のよに、うこんのしやうけんに、おほせつけられけれは、うこん、申けるは、「人けんにても候はゝこそ、へんけのもにして候へは、かけろふ、いなつまなとのことく、みえつ、かくれつ、とんつ、くゝつつ、しゆうしさいに、はたらき候よし、うけ給はり候あひた、しかと、たいちつかまつるへきとも、おほえす候。さりなから、御ちやう、おもく候あひた、御うけ申。まつ〳〵、わかしたくにかへり、もん、木戸、てんしやうなと、ようかいをよくかまへ、人をみな、たしよへいたし、わつは一人、かくしをく。これは、とほそを、よくしめさせんかため也」。

十二月中しゆん、やはんのころ、たゝ一人、たち出て、らく中をたつねありく。四てう、はうもんにて、うこんのしやうけんは、しはし、立やすらひ、「これよりひかしへや、行へき。又、にしへやゆかん」と、しあんしゐたりしところに、ひかしにあたり、人のあしをと、まちかく聞えけれは、うこん、あやしく思ひ、きつとみるに、きゝしにかはらぬ、十七八のひちよ、たけなるかみをみたし、しろきこそてに、くれなゐのはかまきて、うこんにむかひ、ことはをかくるやうは、「いかに。御身は、たれ人そ。われは、御しよをしのひいて、みちふみまよひ、行へきかたをしらす。三てうほり川とやらんは、いつくにて候そ。をしへてたへ」とそ、申ける。

うこん、これをきゝ、うたかひもなき、かのへんけのものそとよ。さらは、一首よみて、心をみん」と思ひ、かくなん、

やことなき雲の上人あやしくも

ひとりたとりしみちの玉ほこ
女、かへし、
さよ更てゆきゝの袖もたえ〳〵の
おりしもわれをとふ人はたそ
と、ありけれは、又、うこん、
れいならぬわかたらちねをとひかへる
人に心をへたてはしすな
「れいならぬとは、わつらひ、たらちねは、おやなり。おやのわつらひを、みまひて、かへるものなり。心をへたてそ、くるしからぬもの也」といふなり。
女、このうたを聞、「さては、くるしからぬ人」と思ひて、かくなん、
ものうさよさむきよすからわひしくも
みちのちまたにひとりねやせん
と、よみけれは、うこんのしやうけん、
あやなくもみちのちまたのひとりねを
われになさけのあるよしもかな
と、ありけれは、又、をんな、
うちつけにはちかはしくもいさなはれ
人のなさけをあたになさしと
といへは、うこん、うれしく思ひて、「さらは、こなたへ」とて、手を引て、わか屋にかへり、戸をひらき、うちへ入ける。
かねて、こしたることなれは、かのわつは、とほそを、よくさして、さかつきをとり出し、しゆ〳〵のさかな、とゝのへて、もてなし、さかつきのかす、かさなれは、をんな、しやうたいなく、みえしところに、うこんのしやうけん、思ふやう、「此をんな、ねたらは」と、まちけれとも、ねるけしきなけれは、そのまゝ、とつてをさへ、「なんち、わうしやうに出て、人をなやます、けしやうのものそ。のかすまし」とて、つゝけさまに、三かたな、さしとをせは、わつはも、二かたな、さす。
さしとをされて、雪女、うこんのしやうけんを、二つに引さき、かのわつはをつかんて、戸をけやふつていて、わつはを、人つふてに、うちけれは、半町はかり、なけられて、しはらく、しゝたれとも、又、いきかへり、「人やある」と、よはゝりけれは、人出て、みるに、かうへ、うちくたけ、こしのほねも、うちおれたりしかとも、いまた、いきのかよひて、申やう、「われは、うこんのしやうけんか、わつはなりしか、けしやうのものに、人つふてにうたれて、かやうのていたらくなり。しかれとも、うこん、かのけしやうのものを、三かたな、さしとをす。我らも二かたな、さして候ほとに、かのけしやうのものをは、たいちしたりと、おほえ候。うこんは、引さかれて、うせ候ひぬ。このよし、まんちうへ、おほせあけ給へ」と、いひて、つゐに、うせにけり。
人〳〵、まんちうへ、このよし、申あけけれは、まんちう、きこしめし、「うこんや、わつはか事は、ふひんなるしたいかな」と、おほせられ、「されとも、五かたなまて、さしたらんに、なとか、そのたぬき、しなて、あるへきか」と、ふひんに思しめす中にも、御よろこひは、かきりなし。
［挿絵・第二図］

かくて、そのゝち、雪ふれとも、雪をんなも、出されは、みやこ人、あんとの思ひをなし、こくとあんをんに、そのとしは、くれにけり。

明る長とく二年、きさらきの末つかた、よもの山〳〵は、花咲て、かすみをくめる袖のゆきゝ、にきめくおりふし、たいらのかねもりの御子、かねのふとて、とし十八になり給ひしか、きりやう、こつから、人にすくれ、歌のみち、くはんけんにも、くらからさりし人なり。

しかるに、かねのふ、ひかし山、さくらかりして、をとは山のふもとを、馬にのり、さゝめかひて、とをり給ひしところに、山かけに、まくうちまはし、ひやうふを立、しゆえんなかはとみえつるか、十五六はかりなる女はうの、ひすいのかんさし、せんけんのひん、かつらのまゆすみ、にうはのすかたにて、かねのふの、馬のくちにすかり、「一しゆのかけのやとりも、みなこれ、たしやうのえんそかし。しはらく、やすみ給へ」と、かねのふをとめけれは、もとより、かねのふ、いろこのみなる人にて、かくなむ、

もえいつるみちのくさはの露のまも
なさけは人の心なりけり

とありて、むまよりおり給ひ、まくのうちへいりて、みたまへは、下女二三人よりほかに、人もなし。

［挿絵・第三図］

さて、さけをすゝめ、さかつきを、さいつ、さゝれつし給ふほとに、なかき春の日も、やう〳〵暮かたになりけれは、かねのふ、「いとま申さん」と、おほせけれは、女房、かねのふのたもとをひかへて、いふやうは、「御はつかしく候へとも、思ひ、うちにあれは、いろ、ほかにあらはれさふらふそや。あはれ、御なさけもなし。ましまさは、いさなひつれて、ゆかせたまへ」とて、かほに、もみちを引ちらし、ふかく、思ひいりて、うちしほれたる、ありさまなり。

かねのふ、これを見給ひて、こゝろにおもはるゝやうは、「ふしきのことを、申つるものかな。さためて、我に、ふかく心をかくるけしきなれは、いさなひ、つれて行へけれとも、いかさま、この女はうは、たゝ人ならす。よしありけなる人なれは、つれてかへりたらん時、のちのとかめも、いかならむとは、思へとも、よし〳〵、それもちからなし。此ことにつき、たとひ、つみにはしつむ共、みやこにて、みなれたる事もなきほとの、ひしんなるか、かやうにいひかくることを、いかてか、むなしくなすへし」と、おもひ給ひて、かねのふ、上らうに、の給ふやうは、「こなたよりこそ、かくは、申たく思ひ候つれとも、はゝかりなれは、御心のうち、をしはかりかたく候ひて、かさねて、玉つさのたよりをとそんし、まつ、たゝ今は、なこりの袖をふりきり、立わかれんとせしところに、かくおほせらるゝ、うれしさは、たとへむかたもなし。さりなから、のちのとかめのいかならんとは、思ひしかとも、よし〳〵、君ゆへに、いかなるつみにしつむとも、ちからをよはぬしたいなり。さらは、いさなひかへらん」とて、かのひめをこしにのせ、さきにたてゝそ、かへられける。

かねのふ、やかたに入まいらせ、まことの大り上らうとおもひ、いつきかしつき、てうあいし給ふこそ、はかなけれ。しの

ひ殿をこしらへ、かのひめをいれをき給ひ、をとは山よりいさなひ給へは、をとはひめとそ、なつけ給ひける。

あるゆふくれのことなりしに、かねのふ、かのおとはひめと二人、にはのえんにいてゝ、ゆふすゝみしたまひて、かくなん、

夕ま暮はしゐに袖のすゝしくも
かほりふきくるをとは山風

と、ありけれは、ひめ、とりあへす、

をとは山ふきおろす風のかほるより
まさりし君の袖のうつり香

と、よみけれは、かねのふ、ひめの心を見んと思ひ給ひて、ことをとりいたし、しらへたまひて、をとはひめに、まいらせられけれは、をとはひめのきんのしらへ、世にたくひなき御ことなれは、かねのふは、なを、いやましの思ひ、あさからす。

さて又、かねのふ、の給ひけるは、「ことしは、わかちゝ、かねもりの、七年きになりぬれは、ほけきやう一ふ、かき、くやうするなり。ひめも、かき給はんか」と、おほせけれは、「されは、れうしを給はれ」とて、すなはち、ほけきやうをかけるを、かねのふ、御らんして、「さても、うつくしき、ふてのすさひかな。これ、たゝ人には、よもあらし。いかさま、神ほとけのけしんか」と、あるときは、たつとみ、又あるときは、「天にあらは、ひよくのとり、地にあらは、れんのえたとならん」と、ふかく、ちきりをこめ給ひしところに、かねのふのうちに、ゆりと申をんなあり。

日ころ、かねのふ、ふかくちきりをこめ給ひ、てうあい、なのめならさりしか、をとはひめに思ひかへられ、明くれ、ゆりひめは、ものうき思ひにふししつみけるか、かねのふに申やう、「此ころ、御てうあひなされ候をとはこせんは、人けんとおほしめして、ふかく、御ちきりをこめさせ給ふ事の、はかなさよ。あれは、こそのふゆのころ、みやこにて、人をなやませし、ゆきをんなにて候そや。御うちの人は、いつれもみな、しらぬものはなく候へとも、あまり、御てうあいなされ候ゆへ、はゝかりたてまつりて、申あくる人もなきとこそ、おほえ候へ。わらはも、とく、そんして候へとも、『わらはを、すくさせ給ふにより、あらぬ事を申』と、覚しめされ候はんと、そんして、今まて、申さす候へとも、『御ため、あしきことなり』と、人〳〵、しきりに申候ほとに、なに事をもかへりみす、御ためはかりと、おもひまいらせて、かやうに、申あけ候。此うへは、めしをかるへきも、又、めしをかるましきも、御心まかせにて候」とそ、申ける。

かねのふ、きゝ給ひて、「われを、思ひかへたることなれは、あらぬことを、さゝゆる」と、おほしめして、の給ひけるは、「さて、たぬきにてあるへきせうこは」と、おほせけれは、ゆり姫、申やう、「せうこと申は、御うちの人、一人ものこらす、くちをそろへて申こそ、たゝしきせうこにて候はん」と、申せは、かねのふは、すこしももちゐ給はす、「よしなきこと、なを申そ」と、の給ひけれは、ゆりひめは、ちからをよはぬふせいなり。

かくて、をとはこせんは、ゆりひめか、さゝへ申ことを、たれいふともなけれとも、聞つけて、ほむらをこかし、はら立

て、その夜のふくるを、まちゐたり。いたはしや、ゆりひめは、かねのふに、ちうを申せ共、もちゐ給はねは、いとゝ、ものうきとこにふし、すこし、まとろまんとせしところに、なにとはしらす、ゆりひめを、とつてをしつけ、くひねちきつて、こくうへすて、むくろはかりそ、のこりける。

このよし、かねのふに申けれは、かねのふ、大きにおとろき、みたまへは、たちかたなにて、きりたるにはあらす。「いかさま、これは、人けんのわさにては、あるましき」と、思ひ給へとも、をとはひめこせんのしわとは、ゆめ〳〵、しろしめされす。

さるほとに、かねのふのうちに、ちうせつのをのこ有て、かねのふに申やう、「はゝかりおほく候へとも、そんするむねを、申あけ候。このたひ、ゆりひめをかいし申事、人けんのわさにては、よもあらし。はかせに、うらなはせ御らん候へかし」と、申けれは、かねのふ、「けにも」と、おほしめし、すなはち、はかせに、うらなはさせ給へは、はかせ、申やう、「これは、おなしやなゐに、しゆつしやうのしれぬをんなあり。そのをんなのわさなり」と、申す。

その時、座中の人〳〵、みな、かんしけり。

［挿絵・第四図］

かねのふ、の給ふやう、「かまへて、この事、いさゝかさたして、をとはひめにしらすな。いろにも、見てとられな」と、おほせつけられ、そのまゝ、やかたのそとまはりに、いくへも、とのゐのもの共をすへをき、かねのふ、さらぬていにて、をとはひめにむかひ、おほせけるは、「しうかのしさいにより

て、たゝいま、さんたい申なり。そのほとは、心をなくさめ候へ」とて、さま〳〵のさうしなとを、とりいたし、をとはひめに、まいらせらるゝ。

さて、かねのふは、さんたい有て、はしめよりの事共、くはしく、そうもん申されけれは、くきやうせんきまし〳〵て、「ふしきにおほせて、たいちあるへし」とて、「又、たゝのまんちうをめして、このよしを、おほせて、たいちさせよ」と、ありけれは、かねのふ、申されけるは、「われら、かひ〳〵しくは候はねとも、たはかりて、かのけしやうのものを、たいらけ申さんに、なにのしさいの候へき」と、そうもん申されけれは、くきやうせんきあつて、「もつとも」と、とうし給ひ、「さあらは、まんちうは、やかたのそとをしゆこし、にくるところを、たいちせよ」との、ちよくちやうなり。かねのふ、かさねて、申さるゝやうは、「おほそれおほき申事にて候へとも、それ、けしやうのものは、つるきにおそるゝよしを、うけ給はり候あひた、あはれ、御つるきを、くさし給はり候へかし。すみやかに、たいちつかまつり候はん」とそ、申されける。

みかと、えいふんまし〳〵て、かすの御つるきの中にも、御てうほうの、三てうこかちむねちかゝ打たる、こきつねまるをそ、くたし給ふ。かねのふ、御けんを給はり、いそき、わかやにかへり給へは、まんちうは、かねのふと心をあはせ、やかたのそとのまはり、五へ、なゝへにとりまき、いかなるねすみ、いたちほとのものなり共、やはか、のかるへきやう、なかりけり。

さるほとに、かねのふは、まつ、御つるきをかくしをき、さ

らぬていにて、をとはひめに、の給ふやうは、「たゝ今、かへり候。さためて、まちかねさせ給はん。いさ、はしゐして、ゆふすゝみせん」と、の給ける。

長とく二年、六月十三日の、暮かたのことなるに、ことをしらへ、いまやうして、さけをすゝめ、さかつきのかす、かさなりければ、「いさ、すこし、まとろまん」とて、二人ともに、木丁のうちに入給ひ、かねのふは、そらねふりして、ひめのきしよくを、うかゝひ給へは、姫は、さけにえひて、せんこもしらす、ふしたれは、「すは、時分はよきそ」とて、かくしをきたるつるきを、ひむぬひて、かのひめか心もとを、二かたなさしとをし、ひるむところを、くひうちおとし、そののち、手あしをきり給ひて、さて、火をともし、み給へは、その長、三尺あまりの、けたもの也。

かしらは、とら、つるきのことくなるきは有。たうは、ふるたぬき、あし手は、くまのことく也。おそろし、ありさま也。みかとをはしめ奉り、くきやう、殿上人、ふしにいたるまて、かねのふの手からを、ほめぬ人こそ、なかりけれ。

［挿絵・第五図］

かねのふ、申されけるは、「是、わかかうみやうにあらす。ひとへに、こきつね丸の、御つるきのゐくはうによつて、たいちつかまつり候」と、申されけり。

さて、このけしやう女のくひ、手あしをも、ぬひつかせ給ひて、らく中らくくわいを、三日引わたし、そのゝち、かはらにさらされたり。

さてこそ、「天下太平の御代となりしも、こきつね丸の御つるきのゐくはう」と、人、申あへり。雪女とて、けしやうのものありと、今の世までも、申つたへしは、此時よりの事成けり。